

聞名仏教

第 149 号 毎月発行
(発行日) 2023 年 2 月 1 日
発行所: 真宗大谷派念佛寺
〒 663-8113 西宮市甲子園
口 2 丁目 7-20
JR 甲子園口駅下車歩 4 分
電話 (0798・63・4488)
(発行人) 土井紀明
<http://nenbutsuji.info/>
アドレス nenbutuji6@gmail.com
郵便振替「東本願寺護持基金」
00930-7-146886

《 聞法会ご案内 》

- 〈同朋の会〉
毎月 22 日 午後 2 時始
(8 月は休みます)
- 〈念仏座談会〉 8 月は休み
毎月 12 日 午後 3 時始
- 〈「聞名の会」法話・座談〉
毎月 6 日 午後 7 時始
- 〈真宗入門講座〉 (副住職担当)
毎月 18 日 午後 6 時 30 分始

かくれた念仏

佐々木蓮磨

大正の中頃、尼港事件といつて、まことに残酷きわまる惨事がありました。それはシベリアのニコライフ

スクに駐在していた日本の軍人、ならびにその家族達七百人が一人残らず戦死または惨殺され、幼児を含む婦女子に至るまで、氷の解けきらないアムール河に沈めたという悲惨きわまる事件であったのです。

そのさい、家族達が地下室に監禁されていたときの話であります。その監禁の様子は想像も及ばぬほどのみじめなものであったらしいです。ところが、その中に中年の一人婦人がいて、自分のことは全く意に介する風がなく、幼児や傷病者の世話をしたり、悲嘆に泣きくずれている人達を慰めたりして、坐る暇もないほどに、かいがいしく立ち働

いていたのですが、絶えず小声でブツブツと何かを唱える声が聞こえたそうでもあります。

この婦人の尊い態度には、残忍をもって聞こえた襲撃のバルチザン(共産ゲリラ)も感動したらしく、そのことを記録にとどめておいたものが、どういう都合であったか、その後内地に伝わって、当時、名もなき雑誌に掲載されたのであります。

また私の知人の息子が、戦後ソ連に抑留されていたところ、やがて帰還して、いろいろとソ連滞在中の話を聞かしてくれたのですが、その中で強く私の心を打つたのは、一人のクリスチャンの婦人(ソ連人)が、抑留兵の病舎で、傷病兵に対して、親身になって世話をしてくれたので、自分としては、それがソ連人である

というような気持ちで全く消え失せて、なんだか郷里の母親にでも世話をしてもらっているといったような気持ちになつたので、帰還するのは喜ばしいが、その婦人と別れるのは淋しかった、と話したことでありました。

一人は死を間近に控えておりながら、悲惨な同胞のためにわれを忘れて世話をし、そのまま異国の地に骨を埋めた念仏者であり、一人は外人の抑留者を、わが子の如くに世話をしたクリスチャンであります。

国は異なり、宗教は違つておりますが、そこに通っている人間愛の動きには、なんらの変わりがないように思われます。

こうした宗教人の美談を聞くとき、宗教的確執によつて、恐るべき対立抗争が起こるといふことは、どう

いうわけでありましょうか。これは宗教人の深く反省せねばならぬ点ではないか、と思います。もともと宗教というものは我執を砕いて人の和を実現する道であります。また宗教に固執すると、これほど度し難いものはないようでもあります。

(了)

【木村無相さんの詩】

ひとすじの道に
出たものは
しあわせ
ひとすじの道を行くものは
しあわせ
ひとすじの道で
死ぬものは
しあわせ

現代真宗問答

14

B「ではアミダ仏の智慧と慈悲の関係はどうなのでしょうか」

A「この智慧があると、他のいのちと自からのいのちが響き合います。そこに共感が自ずから起こります。そういう共感が限りなく広大であり純粹であり深いのが仏の慈悲といわれるのでしよう。自と他が一体であるという智慧から自ずから慈悲が起ります」

B「元に返りますが、アミダ仏の智慧は一切の生きとし生けるものをあたかも自己の如くに見る智慧であり、それゆえ一切の生きとし生けるものを我が子の如くに慈しむ無量の慈悲のお心なのですね」

B「真宗ではアミダ仏とよくいわれますが、アミダ仏はどういうお方ですか」
A「それについては、まずは親鸞聖人のお言葉に尋ねるのが筋ですね」

がないこと虚空の如しで、虚空は大空ですから無量無辺を表します。ですから無量の慈悲です。そして〈智慧円満にして巨海のごとし〉で、智慧は悟りの智慧で、その智慧がこの上なく完全円満であつて、〈巨海〉のように広大であるということ

A「仏の悟りの智慧の内容は自と他、主観と客観が一体不二ということを完全に知り抜いた認識のことといわれていきます。それゆえ万物と自己とは一体であり、万物をして万物たらしめているのちとそれを知っているのちとは同じ一つのいのちであり連なっていることをこの上なく深く認識している、それが仏の悟りの智慧といわれています」

A「ええそうです。佛説無量寿経では、仏の智慧から衆生を見た言葉として〈もろもろの衆生において、みそなわすこと自己のごとし〉と説かれています」

A「ええそうです。『法華経』には仏の言葉として、〈今、この三界は、皆これ、わが有なり。その中の衆生は、悉くこれわが子なり〉と説かれています。三界とはこの世界です。この世界を自己と一体であると悟り、その中の衆生を我が子の如くに感知している、これが仏の大悲の智慧です」

A「聖人のお言葉で非常に分かりやすいお言葉があります。それは『浄土文類聚鈔』の〈文類偈〉に次のようなアミダ仏についてのお言葉があります。

親鸞聖人は述べておられます。この文類偈の表現が私には有難いです。なお昔、アメリカ伝道に生涯を捧げた京極逸蔵師がアミダ仏を無限 (infinite) の〈三つのL〉で表現しました。三つのLとは、LIFE (いのち)、LOVE (慈愛)、LIGHT (光) で、それが無限であるはたらき、それがアミダ仏だと表しました。これも分かりやすいですね」

A「そうですね。自他不二、自他一如という智慧と同じとは言えませんが、これにヤヤ似た感覚は親子の間の感情ですね。我が子の痛みや苦しみをあたかも自分の痛みや苦しみのように感じる、これは親子における一体感ですね」

B「私たちはお互いに別物のように思っていますが、本当は同じいのちにおいて存在しているのですね」

B「智慧と慈悲は別々ののはたらきではなくて、智慧は慈悲としてはたらき、慈悲は智慧にもとづいてはたらくのですね」

寿命延長、よく量ることなし

慈悲深遠にして虚空のごとし

智慧円満にして巨海のごとし

A「ええそれゆえ一言で言えば〈大悲の智慧〉ともいわれます。また光明のはたらきともいわれるのです」

B「この光明と智慧の関係はどう理解したらいいのですか」

慈悲が深くてどこまでも際

量にして虚空のごとし

慈悲が深くてどこまでも際

量にして虚空のごとし

慈悲が深くてどこまでも際

慈悲が深くてどこまでも際

量にして虚空のごとし

慈悲が深くてどこまでも際

量にして虚空のごとし

慈悲が深くてどこまでも際

A 「これについてですが、親鸞聖人の『唯信鈔文意』に、

アミダ仏は、光明なり。光明は、智慧のかたちなりとしるべし。

と仰せられています。このさとの智慧が形をとっているのがアミダ仏の光明だといわれるのです」

B 「悟りの智慧がなぜ光明なのでしょうか」

A 「大体、アミダ仏が無量の寿命・智慧・慈悲だといわれたのは、アミダ仏に体験的に深く目覚めたお方が、

その経験からアミダ仏について人に説く場合に、アミダ仏をこうした言葉でもって言い表されたのです」

B 「そして、アミダ仏のはたらきをハッキリと感得されたのが仏陀（覚者）なのです」

A 「ええ、その仏陀が感得されたアミダ仏のはたらきを大無量寿経では光明無量・寿命無量と表現されたのです。光明についていえば、例えば仏陀釈尊の場合、

悟りを開く前は人生も世界も闇の如くであり、それを解決しようとして修行されて真理を悟った時、であった真理によつて釈尊の人生は全く明るくなり、世界は輝いて見えたと思います。

それゆえ悟られた真理を光明であるとして表現されたのは自然なことです。あなたもアミダ仏にであられると、その経験は闇の中で光にであつたような経験となるでしょう」

B 「それゆえ仏陀釈尊は悟られた真実を表現する時、無量の光明と表されたのです」

A 「悟られた真理は悟った人にとつては光明であり、悟られた真実は限定できない広大なはたらきですから、その光は無量といわざるをえないのです」

B 「であつた真実のはたらきを説き表されたのが経典です」

B 「ではなぜ真実のはたらきを智慧と表現されたのでしょうか」

A 「真実にであうと、心に

智慧が生まれるからです。真実に触れたとき、人と世界の根源的な真理が分かり、それによつて人と世界の本当の在りようが分かるからです。このような人と世界の根源的な真理を知る認識が智慧でしょう。仏陀釈尊は根本の真理に目覚めて本当の智慧が湧いてきたのです。そしていただいた智慧の源をアミダ仏の無量の智慧と表し、無量の光明と表されたのでありましょう」

B 「私たちもアミダ仏にふれると智慧が与えられ人生に光がさしますか」

A 「当然そうなりましょう。知られた真実がほのかであつても、ささやかながらも同じ智慧が私たちに与えられるのです。アミダ仏にふれるとほのかながらも人と世界の基本の道理が知られてきますから、智慧をいただいたと言えましょう。釈尊の場合はその悟りの智慧が広大ですので、アミダ仏のお徳を限りなく智慧のお徳であると讃歎されるので

しょう」

B 「アミダ仏にふれると自

ずからアミダ仏は光であり智慧であると自然に讃えられるのです。ではその悟られた人と世界の基本の真理とは何ですか」

A 「アミダ仏と人（万物）とは聖人のお言葉で言いますと（撰取不捨の真理）です。今日の言葉で言いますとアミダ仏と人は不可分であり不可同であり不可逆の関係真理といえます。これについては別の機会にまた申します」

B 「アミダ仏は寿命無量であれば私たちの寿命はアミダ仏の寿命の中にある小さないのちだということは分かりません。ただアミダ仏の寿命とアミダ仏の慈悲（あるいは智慧）とがどういう関係になるのでしょうか」

A 「これについては、親鸞聖人の有力のお弟子の慶信が宗祖への手紙の中で、浄土に生まれて仏に成れば

〈寿命無量を体として、光明無量の徳用はなれたまわざれば〉

とおっしゃっていますので、宗祖もそのように考えておられたのだと思います」

B 「寿命が本体で、光明は寿命から出たはたらきなので、光明は智慧のはたらきですから、アミダ仏は寿命無量・光明無量なので

すね」

A 「ええそうです」

B 「無量の寿命のいのちのはたらきのなかに光明のはたらき（智慧・慈悲）がこもっているのは不思議ですね」

A 「アミダ仏の無量のいのちは私のいのちを超えていながら私たちのいのちの源ですから、たとえ迷いが深くて私たちのいのちの底には智慧ある慈悲のはたらきがこもっているといえましょう」

B 「迷いの深い私たちのいのちの底にも私を超えたいのちがはたらいていて、このいのち自体に智慧ある慈悲のはたらきがこもっているのです」

A 「ええそういいいと、七十六歳で逝去された偉大

な佛教者であった鈴木大拙博士の〈老人と小児性〉という遺稿に、

獅子が鹿を打つを見て「可哀相だ、なんとかならぬか」と考え込む。

野中の一本松が雨にぬれてしょんぼり立っているのを見て、これに傘でも差してやれぬかと憐れむ。

二階に寝かしておいた子猫がどうしたかと気にかかるので、階段の下まで来て耳をすまして、様子を聞きとらんとする母親の真剣さ、これらがいずれも大悲の本願から出ている。この本願に率うのが道である。

と書いています。雨に濡れている一本松を見て、思わず傘でもさしてやりたいという自他一体の感覚からくる思いが一瞬でも起こるのですね。これは私の考えと違うよりは、いのちの共感からくる憐れみの心ですが、これは私の思想や意見以前の私のいのちの底から起こる情ですね」

B「たとえ猫であっても親

子の情があるということはいのちの中には慈悲のはたらきがあるという徴なのですね」

A「小さいのちにも慈悲心がこもっていると思いません。無量の寿命には無量の慈悲心がありますから、この心が大悲の本願としてはたらきだしているのだと鈴木博士がもうされるのでしよう。その大悲の本願が具体的に仏陀によって説かれたのが『仏説無量寿経』といえましよう」

B「私たちのいのちは私たちのいのちを超えた量りなきいのちによって支えられ、そこに慈悲心がこもっているのに、なかなかこの慈悲心が表に現れず、それどころか残酷で冷たい行為をしばしば為してしまうのはなぜですか」

A「いのちそのものに慈悲心があっても、私たちは自我愛が主となり自我愛が私たちを取っている凡夫の身体において現実を生きています。それゆえ、いのちには慈悲心があっても、それが表の人間の行為となって

なかなか現れないし、一瞬あらわれてもなかなか続かないのです。一瞬〈ああ、かわいそう〉と思ってもその時だけで終わってしまいます。これが凡夫の現実です。たとえ慈悲心が現れても自我心が強固にひっついていて罪深い身体を持っている限り極めて限定されてしか働かないのですね」

B「寒い冬に大阪駅に降りて外に出ると、ホームレスの人が道ばたで寒さに震えているのを見ると自分も同じように寒さを感じ、〈ああかわいそうだ〉という思いがたとえ一瞬であっても起こります。けれどもその場限りが多いです。通常は見えて見ぬふりをして通り過ぎます」

A「そうですね。それが現実の私たちの姿です。我執我愛の自我心がなくなれば、慈悲心が全開するのでしようが、それはこの煩惱が形を取った我身が終わり、浄土に生まれてはじめて、仏の慈悲心にならせていただくのだとお聞きしています」

B「浄土に生まれて仏にな

るのはそういうことですね」

A「無量のいのちの大悲の智慧は、私たちの現実を悲しみ、浄土に生まれさせて仏にしようと働きかけてくださり、それが本願の念仏となつて、私たちに喚びかけてくださっているのですね」

A「まったく有難い不思議です」

B「ですからお念仏には無量の寿命に無量の慈悲がこもつて、それが私たちの口に南無阿弥陀仏と現れ、南無阿弥陀仏と喚びかけてくださっているのですね」

A「そうですね。一声一声の南無阿弥陀仏は〈汝を抱いている、汝を引き受けている、汝を浄土に連れて行く〉という大悲の仰せとなつてお聞かせくださるのです。このお声のアミダ仏によつて、〈ああアミダ様は私と共に、私に一瞬も離れずにいてくださる〉ということが知らされアミダ様と離れない身になるのです。それが摂取不捨の利益の救いです」

(了)

【住職雑感】

趣味は音楽を聴

く以外にはなく、趣味はと尋ねられ
たらすぐバッハと応えるのだが、バ
ッハだけを聴いているかという
時々、メンデルスゾーンやブラーム
スなども聴く。それに黛ジュンやテ
レサテンなどもたまに聴く。更には
韓国トロットの女王・沈守峰の歌、
またインドのシタール演奏やパキス
タンの民族音楽にも時々耳を傾け
る。Youtube でいくらでも聴ける。
曲を聴くと、その曲が流行った時代
の風景が浮かぶ。「お富さん」を聴
くと小五・六時代に帰り、「高校三
年生」を聴くと、この歌が流行して
いた時が高三だったのであの時代に
戻る。松尾和子を聴くと二十代前半
の何か陰であるが夢ある時代を想
う。こんな経験もした。阪神大震災
でパチンコ屋の寮が倒壊し七名が亡
くなつて、通夜で全員におかみそり
をした。悲惨な姿であった。その晩
帰宅して、伊東ゆかりの「小指の想
い出」を聴いた。その後、「小指の
想い出」を聴くたびに、あの悲惨な
情景が必ず脳裏に浮かぶ。曲にはそ
れに結びついた過去の経験を想起す
る力があるようだ。老人ホームで童
謡などをみんなで歌うと聞く。恐ら
くそれによつて、幼い頃の楽しかつ
たふるさとの経験などを反復するこ
とができるからであろう。